

第123回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2019年12月9日(月) 14時～17時

兼題「年末賞与」

- 川井素山 ○躓けば影もよろける鎌鼬  
飲み代を賞与で払ふ盆と暮  
遠山を染める夕日や寒天干す  
寒鯉の砂吐かせらる古盥
- 保井寶正 ○熱戦に懐炉も熱きラグビー場  
苦屋にも冬の音する聖夜かな  
賞与なく昭和も遠ほくなりけり  
花舗の朝緋や黄あふるるクリスマス
- 佐久間喬 ○ささやかにケーキ切り分く冬賞与  
ボーナスの出ぬ日に求む宝くじ  
栗鼠走る落葉の世界広がれり  
初雪をたつぷり被る富士の山
- 丸山酔宵子 ○黒塀や門にひとひら柿落葉  
同伴や年末賞与懐に  
碧空に蓬け輝く枯尾花  
今宵咲く長く盛りの姫椿
- 吉田啓悟 ○エイヤッと布団けつて始まる日  
少しだけ夢を捨てさる冬ごもり  
しぐるるや舗装道路の色濃くす  
昼食に酒を添へられ冬賞与
- 青木英林 ○年越しの蕎麦打つ腕は衰へず  
ブラリ旅猫もゴロリと日向ぼこ  
冬帝が実効支配北の空  
ボーナスが街の商戦活気付け
- 山本草風 裏路地の舞妓走らす初時雨  
冬賞与盧生の夢か今可笑し  
植木屋の手わざ見事に冬の庭  
喜寿を超へ輪廻に迷い年暮るる
- 渡辺鯨波 ○十二月八日頭痛腰痛不明熱  
年末賞与乗せられるネット商戦  
ボーナスや会話途絶えぬ昇降機  
ノンポリのままで老境根深汗

- 後藤克彦 ○手袋をさがす苛立ち年の暮  
減額の年末賞与出るは愚痴  
マスクして咳の我慢やバスの中  
校門へ駆ける子多し冬の朝
- 永井正孝 ○年忘れ探すふところ下足札  
ボーナスが振込みとなり味気なし  
仲間の眼背中に感ず交渉日  
土手走る枯野の犬の長き舌
- 原 晶如 ○賑はいの市に鯛焼うつろな眼  
ボーナスの無き身に旨き手打ち蕎麦  
咲くほどに空の寂しき冬桜  
小六月埴輪の口のなまめかし
- 金森純女 ○冬晴れや路地裏駆けるランドセル  
ストーブの炎見たし街暮らし  
大根や切り口にじむ千六本  
いつからか年末賞与すたれけり
- 青葉ひかる ○山茶花の宴<sup>うたげ</sup> 盛会にて安堵  
年末賞与いつかぬくもり消えゆきて  
遊歩道戦い終わりにて枯れ葉舞う  
思案する日々過ぎ去りて聖夜なり

次回「萩句会」

日時 2020年1月13日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『氷柱（つらら）』一句  
当季雑詠 三句